

医学衷中参西録 治傷寒方1

《傷寒論》太陽篇に基づく傷寒初期治療の主要処方
方を解説する。麻黄加知母湯・加味桂枝代粥湯、
小青竜湯、従竜湯の方意・病理・運用の要点をま
とめる。

基礎理論 § 現代

峯 尚志

傷寒とは何か

寒水の気

傷寒とは寒水の気に傷れた病態である。天には冬季厳寒の寒水の気があり、人には足太陽膀胱の経がこれに対応する。

初期の主症状

- 全身の悪寒（特に背部が甚だしい）
- 背中から下肢にかけての全身の痛み
- 脈は陰陽ともに緊・弦直有力
- 微喘を兼ねることが多い

外感の襲来は類似したところからくるため、傷寒証はまず足太陽が管轄する背部に受ける。

麻黄加知母湯：傷寒・無汗の主方

傷寒で汗がないものを治す。《傷寒論》太陽篇において麻黄湯は傷寒初期治療の主方であり、麻黄証は多く、桂枝証は10中1～2に過ぎない。

麻黄

熱性で中空。太陽の經に直走して**皮毛に外達**し、汗解にはたらいて外感の寒を除く。

桂枝・甘草

辛温微甘の桂枝は甘草とともに**肌肉を温めて腠理を実**し、麻黄を助けて寒を托して外出させる。

杏仁

苦降の性質で胸中に入り、降逆定喘する。

知母（加味）

発汗後に解さないことがある原因は余熱未清にある。知母で発表に清熱を兼ねると、発汗後に解さないおそれなくなる。

麻黄の妙用：喘・小便・経絡

1

なぜ傷寒に微喘を兼ねるか

胸中も太陽の部位であり、衛気が寒気に拘束されると大気が内鬱して膨張上逆し肺を衝いて喘を生じる。また風寒が皮毛を侵すと手の太陰肺経にも入り痰涎が凝鬱して喘となる。麻黄は肺経にも入り、鬱満を瀉す。

2

麻黄は経と腑を同時に治す

中空の発汗薬は利小便を兼ねることが多い。**麻黄湯は太陽経の邪を汗から解し、太陽の腑（膀胱）の邪を小便から解す。**経と腑を同時に治すのが仲景の製方の妙である。

3

大青竜湯と知母の応用

大青竜湯は傷寒の無汗煩躁を治す。麻黄と石膏を併用しても汗が出ないことがある。この場合さらに知母を加えると、寒潤な性質で胸中に入り化合して汗を生じ、煩躁は自然に除かれる。

傷寒と温病：初期は異なり、終わりは同じ

初期治療の違い

- 傷寒：温熱薬で発表する
- 温病：辛涼薬で発表する

陽明伝変後は同じ

陽明に伝変した後は、傷寒・温病のいずれも寒涼薬で治し、温熱薬を用いてはならない。温病の初期治療を知ることによって傷寒がはっきりわかる。



用薬の原則：因時・因地・因証・因人

体質・職業による差異

筋肉労働者など身体が強壮な人は、一般の人より多量の薬を要することがある。用薬は病に勝つことを主眼とし、状況に応じて適宜変更すべきである。

一つの考えに固執するな

南方と北方でも必要量は異なる。因時・因地・因証・因人と状況に応じて変更すれば自然に病は治癒する。一つの考えに固執してはならない。



加味桂枝代粥湯：傷寒・有汗の治方

傷寒で汗があるものを治す。桂枝湯を基本とし、黄耆・知母・防風を加えた処方である。



桂枝・芍薬・甘草・生
姜・大棗

桂枝湯の原方。営衛を調和
し、外邪を散じる基本構
成。



黄耆（加味）

大気を昇補し、粥の補益の
力に代える。衛気を強化し
て外邪を拒絶する。



防風・知母（加味）

防風で営衛を**宣通**して粥の
発表の力に代える。知母は
黄耆の温補による熱の発生
をあらかじめ防ぐ。

粥を啜る意義と加味の理由

なぜ粥が必要か

《内経》によれば、大気は後天の水穀の気の培養を受けて生成される。桂枝湯証は大気虚損が根本にあるため、服薬後に熱粥を啜って胸中の大気を補助することで邪に勝てる。粥を啜らなければ効果がなく、逆に病を深く内陷させてしまう。

加味桂枝代粥湯の工夫

王清任は桂枝湯は役に立たないと批判したが、それは粥を啜らないからである。そこで黄耆で粥の補益の力に代え、防風で粥の發表の力に代えた。粥を啜らなくても奏効するよう工夫した処方が加味桂枝代粥湯である。

- 趙初晴の症例：呉鞠通が桂枝湯を投じ、熱粥を啜らせると翌日には治癒した。

桂枝湯と手太陽小腸経：唐容川の論

「傷寒は足経に入り手経に入らず」という後世の説は誤りである。桂枝湯は足太陽膀胱経だけでなく、手太陽小腸経をも兼治する。

小腸と営分の関係

小腸は火を主り血を主り、営分に属す。心陽を布宣し、連網・肝膈から腠理・筋肉に外達して営気と衛気を合わせることで太陽の効用を担う。

桂枝の核心的役割

桂枝は心陽を宣発して小腸連網から外達し、営血を筋肉の間に充たすので邪が留まることができない。桂枝湯はまさに筋肉を和し営血を治す方、小腸血分の方である。

水火合化の理

膀胱は水に属し、小腸は火に属す。火で水を化して太陽の効用が完成する。この水火合化の理を知らなければ、桂枝湯の根源を明確に理解できない。



小青竜湯について

張仲景の《傷寒論》・《金匱要略》に基づく外感
痰喘の神方。その組成・運用・変通の法を詳述す
る。



青竜湯の命名と意義

喻嘉言は「桂枝湯・麻黄湯に大小はないが、青竜湯に大小があるのは、桂枝湯と麻黄湯には変法が多いからである」と述べる。大青竜湯は麻黄湯・桂枝湯の二方に変更を加えたものであり、小青竜湯は散邪と滌飲を兼ねる。「山沢の小竜が頭角を養成し、雷雨に乗じて翻江攪海し、竜門を直奔する」（山や沢で静かに力を蓄えていた若い竜が、時機が来ると雷雨に乗じて天高く舞い上がり、大河や大海を自在に駆け巡り、ついには竜門を越えて真の竜となる。）の意で立方はまことに周到である。

滌飲（てきいん）とは、体内に停滞した「飲」を洗い流すように除去する治法。滌（てき）は洗い清める・すすぐという意味。



《傷寒論》原文と陳修園の注解

原文（第40・41節）

「傷寒、心下に水気あり、乾嘔し、発熱して咳し、あるいは渴し、あるいは利し、あるいは噎（えつ）し、あるいは小便不利して少腹満し、あるいは喘するものは、小青竜湯これを主る」

陳修園の解説

太陽は寒水の気を主り、皮膚に運行し心胸に出入する。寒邪に傷れると寒水の気は運行出入しなくなり、心下に停まって有形の水気に変化する。水寒が肺を傷り気が上逆すると咳・微喘を生じる。一、二証あれば小青竜湯を主るとしてよい。



小青竜湯原方・組成

麻黄・桂枝

各3両。発表散寒・降肺定喘の主薬。竜の翻波鼓浪を担う。

乾姜・細辛・五味子

乾姜は肺の開を司り、五味子は肺の閉を司り、細辛は開閉の機構を動かす。この3味は1つも欠けてはならない。

芍薬・甘草・半夏

芍薬3両・炙甘草3両・半夏半升（湯洗）。滌飲・和營・調和諸薬の役割を担う。

水1斗で先ず麻黄を煮て上沫を去り、諸薬を加えて3升を取り、1升を温服する。

小青竜湯の加減法

微利するもの

麻黄を去り、莢花
（鶏子大）を熬り赤
色にして加える。修
園は茯苓で代用でき
るという。

渴するもの

半夏を去り、栝楼根
3両を加える。

噎えつ（呃逆）する もの

麻黄を去り、炮附子
1枚を加える。

小便不利・少腹満す るもの

麻黄を去り、茯苓4
両を加える。

喘するもの

麻黄を去り、杏仁半
升（皮尖を去る）を
加える。

喘するものになぜ麻黄を除くのか

その1 喘とは必ずしも喘鳴ではない。

麻黄は交感神経作動薬で気管支拡張作用をもつエフェドリンを含み、喘鳴を治療する中心的生薬である。では何故喘するものは麻黄を抜くのであろうか。この疑問は1800年前より発せられている。その理由を考えて見たい。

まず古代において『喘』は呼吸促迫、息切れを含み、気道狭窄による『喘鳴』とは限らないということがあげられる。喘には喘息発作ではない、息苦しさも含まれるわけである。それならば、麻黄を必ずしも必要としない例もありうる。気滞気うつによる『喘』もあれば、慢性心不全による『喘』もあるわけである。

また麻黄が不適切なケースを現代医学的に考えると、老人や虚弱者の場合、心腎が弱く、麻黄によって心臓に負担がかかったり、衛気虚で汗が漏れ出て体力を消耗することがあり、麻黄の適応とはならない。また喘に対し、麻黄をやめて杏仁を痞えとの指示があるが、杏仁は降気、平喘、鎮咳の作用を持ち、麻黄の過度の交感神経刺激による肺気の上昇を納める作用が期待される。次項で自験例について述べる。

喘するものになぜ麻黄を除くのか

その2 症例から考える

ここで自験例を提示する。50代の気管支喘息による息苦しさとか咳に悩む女性。芍帰調血飲と神秘湯で咳も喘鳴も治まり、神秘湯が手放せない。しかし喘鳴はコントロールできているので、麻黄をやめて杏仁の降気平喘を期待して、苓甘姜味辛夏仁湯に変方した。すると咳が治まり、息苦しさは楽になり、表情もおだやかでとても気分がよいということで、継続処方している。麻黄の昇と杏仁の降は相補的に作用するため、しばしば同時に使われる（麻黄湯、麻杏甘石湯）が、麻黄による散がなくなった時は麻黄を使わず杏仁を主薬にした（苓甘姜味辛夏仁湯）が症状の安定した気管支喘息に用いられることも知っておきたい。ちなみに苓甘姜味辛夏仁湯は小青竜湯去麻黄桂枝加杏仁茯苓であり、麻黄抜き的小青竜湯と考えることもできる。喘するもの（息苦しさ）に麻黄を去ることの1例と考える。



石膏を加える意義

《傷寒論》の小青竜湯には石膏の加法はないが、《金匱要略》には小青竜加石膏湯があり「肺脹し、咳して上気し、煩躁して喘し、脈浮なるものは心下に水あり」を治す。天地の気運は数十年で変化し、現代人の陰分は古代人に及ばない。したがって外感痰喘で熱を挟む場合は、必ず生石膏数錢を加え、熱が甚だしければ1両以上を用いることもある。石膏を恐れて少量にすれば効果は得られない。





乾姜・細辛・五味子の薬理

五味子の酸斂

外感の証では五味子を忌むのが原則であるが、乾姜と併用すれば「辛は酸に勝つ」（《素問》陰陽応象大論篇）の理により害がなくなる。酸斂の力が大なので、乾姜の強い辛味で助けることが必須である。

細辛の開閉機構

細辛は味辛でよく開くのみでなく、またよく閉じる。細かく噛むと酸収の意があり、《本経》では咳逆上気を主るという。湯剤では他薬と混じるため、1錢以上入れなければ効力を発揮できない。

外感痰喘の審証施治（7条）

01

気逆迫促・肩で息

小青竜湯去麻黄加杏仁。熱があれば生石膏を加える。

02

脈象無力または数

小青竜湯去麻黄加杏仁に生石膏・人参を加える。

03

吸気困難・脈虚無力

滋陰清燥湯〔滑石1両・甘草3銭・生白芍4銭・生山薬1両〕を用いる。

04

喘軽・脈実・数でない

小青竜湯去麻黄加杏仁・生石膏。脈が数滑なら知母を加える。

05

脈洪滑浮・胸中煩熱

寒解湯〔生石膏1両・知母8銭・連翹1銭5分・蟬退1銭5分〕で発汗する。

（6）実熱で重按無力なら白虎加人参湯の知母を生地黄に代え茅根を加える。（7）結胸を兼ねれば蕩胸湯〔栝楼仁2両・生代赭石2両・紫蘇子6銭・芒硝4銭〕で結を開けば喘は自然に癒える。



麻黄・桂枝・杏仁の使い分け



麻黄

肺気を瀉して定喘する。気分に虚がなく証が実なら除かなくてよい。杏仁を加えて麻黄を半減する選択肢もある。



桂枝

肺気を降して定喘する。血証がある場合は最も忌む。その際は桂枝を去り麻黄を残し、石膏を加えると穏当になる。



杏仁

気虚を兼ねる場合は麻黄の代わりに用いる。喘証が甚だしく実なら杏仁3銭を加え麻黄1銭を残すと早い効果を得る。

徐靈胎の症例：血証を兼ねる外感痰喘

「松江の王孝賢夫人にはもともと血証があり、感冒がこじれて痰喘に変わり、横臥できずに日夜机につっぷして坐ったままで耐えられなくなった。常州の名医・法丹書が効果をあげられず、私に往診依頼があった。『これは小青竜湯証である』と言うと、法は『身体が弱く血証があるのに麻黄・桂枝を使えるか』と言う。『急則ち標を治す。新病を治してから本病を治療してもよいではないか』と答え、投与すると呼吸が平静になり一晩中安定した」

按：血証がある場合は桂枝を去り麻黄を残し、石膏を加えて服用させると穏当で害のおそれはない。

楮槭濃の症例と従竜湯の活用

従竜湯：竜骨、牡蛎、芍薬、半夏、紫蘇子、牛蒡子

症例の経過

肥満体・気虚で痰飲が多く、外感を受けるとひどい喘が半月続いた。小青竜加石膏湯を用い、石膏を恐れて少量にすると効果は緩慢であった。思い切って生石膏1両を加えると1剤で喘は止まり煩躁も癒えた。

従竜湯の位置づけ

小青竜加石膏湯で喘が止まった後に従竜湯を1～2剤服用すれば再発しない。小青竜加石膏湯を2～3剤用いても完全に治癒しない場合も、従竜湯を継服すれば必ず効く。脈と証に熱証がない場合も生石膏数錢を加えて麻黄・桂枝・乾姜・細辛の熱を解すべきである。

虚証を兼ねる外感痰喘の症例

63歳男性・労病兼喘

仲冬に傷寒証、脈浮弱無力。小青竜湯去麻黄加杏仁・生石膏で喘はやや癒えたが脈の微弱が増した。竜骨・牡蛎・野台参・生白芍・山茱萸の方剤で氣息がつながった。再発時は酸石榴を皮ごと煮たスープと生梨果汁を加えて完治した。

門人・高如璧の症例

脈が甚だ虚の外感痰喘に、小青竜湯去麻黄加杏仁に野台参5銭・生石膏8銭を加えると1剤で喘は落ち着き、従竜湯に野台参・石膏を加えて治癒した。

長子蔭潮の症例

喘逆が非常にはげしく脈は甚だしく虚数で他医は治療を断った。小青竜湯去麻黄加杏仁に人参・生石膏各1両を加えると1剤でほぼ癒え、従竜湯去半夏加人参・生石膏を2剤で全快した。



桂枝湯と鼻出血（衄血）の関係

《傷寒論》四十五節：「太陽病、脈浮緊にして汗無く発熱し、8～9日解さず、麻黄湯これを主る」。按：麻黄湯服用後に発煩・目瞶・鼻出血が生じるなら、以前に伏熱があったことを知るべきである。桂枝を除いて知母を加えれば鼻出血は軽減する。五十四節では「頭痛むものは必ず衄す、宜しく桂枝湯」とあるが、血熱で鼻出血しそうな状態では桂枝湯は用いがたく、麻黄湯から桂枝を除き知母・芍薬を加えるのが穏当である。



現代人の陰分と古方の運用

古代人と現代人の体質差

古代人は先天的素質が温和で陰分が容易に虧損しなかった。現代人は煙草・飲酒・過度なストレスにより陰分を損耗しやすく、邪熱による損耗に堪えられない。

涼潤薬の佐使

発表・和解・降下を問わず、熱の徴候があれば知母・生石膏・芍薬のような涼潤薬を佐として加えるべきである。ただし甘寒粘泥な薬物は外邪を锢閉するので用いてはならない。

《傷寒論》への姿勢

《傷寒論》は王叔和の編纂を経たものであり、信すべきところは尊重するが、天地の気運は1600年以上で変遷した。古方に固執して少しも加減しないのは古方をうまく用いたとはいえない。

小青竜湯運用の要点まとめ

神方としての位置づけ

外感痰喘の治療において小青竜湯は神方である。他の証を有していても必要な場合はためらってはならない。

石膏の必須性

現代の外感痰喘には必ず生石膏を加える。7～8銭から1両以上。石膏を恐れて少量にすれば効果は得られない。

虚証への対応

脈が虚なら補薬をあらかじめ準備する。麻黄を杏仁に代え、人参・竜骨・牡蛎・山茱萸などを状況に応じて加える。

従竜湯との併用

小青竜加石膏湯で喘を止めた後、従竜湯を継服することで再発を防ぎ、完全な治癒を達成する。

❏ 乾姜・細辛・五味子の3味は小青竜湯の主薬であり、1つも欠かすことはできない。



從竜湯について

外感痰喘の治療において、小青竜湯の後継として創製された処方。張錫純による臨床経験と理論的考察をもとに、その組成・用法・適応を詳述する。

傷寒・温病研究

張錫純医案

従竜湯の組成と主治

外感痰喘を治し、小青竜湯を服して全快せず、あるいは治っても再発する場合に継服する処方である。

竜骨（煨かずに搗く）

1両 正気を収斂し、逆上の火を引いて宅に帰らせる。粘渋の性により心神耗散・腸胃滑脱を治す。

牡蛎（煨かずに搗く）

1両 竜骨と同用すれば「治痰の神品」となる（陳修園）。泛濫の水を引き下げ、痰水の逆上を鎮める。

生白芍

5銭 陰分を養い、収斂の力を補佐する。発表後の余邪に対して陰津を保護する。

清半夏・紫蘇子・牛蒡子

各4銭・3銭 化痰降気・利咽定喘の要薬。炒して搗き、薬力を十全に引き出す。

❏ 熱がある場合は、生石膏を数銭～1両加える。

創製の経緯と命名の由来

張錫純は従来、外感痰喘の治療に《傷寒論》の小青竜湯加減（麻黄を去り杏仁を加え、熱があれば生石膏を加える）を用いて必ず奏効していた。しかし、治癒後に再発し、原方を再服しても効かないという事例が生じた。そこで本湯を創製し、小青竜湯1～2剤の後に継服させると再発しなくなることを確認した。

「従竜湯」と命名したのは、小青竜湯の後に用いるのが最もよいからである。ただし、発表薬を服用し過ぎた場合も臨機応変に適宜用いてよく、必ずしも小青竜湯の後とは限らない。

竜骨・牡蛎の収洩についての問答

大量の竜骨・牡蛎は収洩し過ぎではないか、外感の余邪を固閉させる危険があるのではないかという疑問に対し、張錫純は前哲の説をもって答えている。

陳修園の説

「痰水は火にしたがい上昇する。竜は陽に属し海に潜み、よく逆上の火・泛濫の水を引いて宅に帰らせることができる。牡蛎と同用すれば治痰の神品となる。今の人はその薬性が洩で脱を収めることを知るに止まるが、浅はかなことである」
（《神農本草經読》）

徐靈胎の説

「竜は天地純陽の氣を得て生じ、骨は最も粘洩で正氣を収斂する。陽の純なるものは天地の正氣であるから、人にあっても正氣を収斂して邪氣を収斂しない。仲景は傷寒の邪氣がまだ尽きていない場合も通常牡蛎と同用している」

張錫純の結論

竜骨・牡蛎は邪氣ではなく正氣を収斂するものであるから、外感の余邪があっても収洩し過ぎになる心配はない。この点を理解すれば、従竜湯の運用に疑問はなくなる。

竜の象徴と腎・元陽の関係

徐大椿（《神農本草經百種録》）は竜骨の薬理を天地の元陽論として展開している。
この理論的背景が従竜湯の成立根拠となる。

天地の陽気の二種

①**元陽の陽**：太極未判以前から存在し、寒暑を起伏とし雷雨はその用。陽は陰を土台として働くが、その本質は陰とは異なる。天包地の関係。

②**陰陽の陽**：太極分判後に顕れ、日月を昇降とし水火はその用。陰と對待するが一体とならない。天地並立の関係。

竜と腎元陽の照応

竜は純正に天地元陽の気から生じ、水に蔵れて水と離れない。春分に陽気が上ると竜は飛翔し、秋分に陽気が下ると竜は蟄居して潜む。

人身の腎は陰中の至陰であり、人の元陽はここに蔵れる。腎は蔵水の臓であって蔵火の臓でもある。陰分の火が動じて蔵れないとき、竜骨の気を借りればその宅に帰還する。

臨床医案：留水石膏飲の症例と從竜湯継服

奉天駅の錢慕韓夫人は仲冬に傷寒証となり、4～5日間喘のため横臥できず、胸中が異常に煩悶した。脈は浮洪かつ長で重按すると実ではなく、舌苔は白厚であった。

1

診断と苦慮

陽明に入るが太陽がまだ残る。小青竜湯は熱性に過ぎ、白虎湯では治喘できないと再三躊躇した。

2

留水石膏飲を創製

蒸留水で石膏を上昇させ胸中煩熱を解し、甘草で石膏を上行させ、少量の麻黄で太陽余邪を散じ定喘した。

3

服法と経過

煎湯を6回に分けて徐々に服用。3回で胸間に微汗が出て好転し、1剤で8～9割癒えた。

4

再診と全治

喘は落ち着いたが咳嗽が残存。玄参・杏仁・栝楼仁・牛蒡子を続服し2剤で全治した。

留水石膏飲の組成と用法

組成

生石膏（細かく挽く）

2両 胸中の蘊熱・煩熱を清解する

甘草

3銭 甘緩の性で石膏を上行に引き止める

麻黄

2銭 佐薬。太陽余邪を解散し、瀉肺定喘する

服法と注意事項

蒸留水（僻地では甘瀾水で代用）で2～3沸煎じ、上澄み大碗1杯を6回に分けて温服する。はじめの3回は1時間に1回、後の3回は1時間半に1回服用する。

病が上焦にあるため、一度に服用すると薬力が下趨し患部を通り過ぎる恐れがある。症状が癒えれば中止し、下焦に冷えを感じた場合も服用を止める。

- ❑ 温病の場合は麻黄を用いず、アスピリン1gを溶かして代用する。薄荷葉2銭での代用も可。

要点総括：傷寒方・小青竜湯・従竜湯の運用

1

傷寒の治法

- 麻黄加知母湯や桂枝湯の加減など、個々の体質・症状に応じた方剤運用が肝要。
- 熱証を伴う際には、涼潤薬（知母・生石膏・芍薬）の佐用を積極的に考慮する。

2

小青竜湯の運用

- 外感痰喘の神方であり、様々な加減法で個別の症候に対応する。
- 現代人の陰分虧損を鑑み、必ず生石膏を併用し、十分な量を投与することで効果を発揮する。

3

従竜湯の位置づけ

- 小青竜湯で喘を止めた後の継服薬として再発防止に極めて有効。
- 竜骨・牡蛎は邪気ではなく正気を収斂するため、外感余邪の固閉を心配する必要はない。